



リレーインタビュー

一筋の航路の先に

Full Steam Ahead

建築家

柏木 由人 インタビュー

Yoshihito KASHIWAGI / Architect

traverse14号から始まったリレーインタビュー企画。17号では、柏木由人氏がTERRAIN architectsからバトンを引き継いだ。自らの本能を信じて建築の道へ。そしてさまざまな出会いに導かれて海外へ。オーストラリアで活躍する彼に、今の日本の建築はどのように映るのか。建築家になった経緯から、代表作『同志社京田辺会堂』の設計を通して、彼の建築への思いを探った。

聞き手=王 隼斉、加藤 慶、川本 稜、キミニッピ・レア、田中 健一郎、田原迫 はるか、ハミルトン 壘
2016.6.22 京都大学 竹山研究室にて

—— マーケティングから建築へ

ハミルトン 建築との出会いを教えてください。

柏木 学部時代は、商学部でマーケティングを勉強していました。「どうやって物を売っていくか」ということに、昔は興味があって。大学院にも、マーケティングを勉強するために入学したんです。その大学院のカリキュラムでは、最初の一ヶ月は視野を広げるために専門分野と違う学問を経験するということになっていました。その選択肢の中に建築があったんです。そこでやってみたら、すごく衝撃を受けまして。自分の文系の学問への接し方と、理系の人たちの学問の接し方があまりにも違うんですね。本能的に、自分が今後やるべきことは建築なんじゃないか、と思ったんです。そこで先生に、マーケティングを勉強しつつ建築も勉強したいと相談したら、「忒足の草鞋^{わらじ}なんて 100 年早い、どちらかに決めなさい」と言われまして。やはり本能で感じるものは無視できないと思って、建築に転向しました。あとは、実は父が建築家で、建築が身近なものだったということもあるかもしれません。父親の生き生きと仕事をしている姿は、子どもの頃からすごく印象的でしたね。

ハミルトン 大学院から建築を学び始めたことを振り返って、どのように感じられますか。

柏木 最初は、図面や模型を通して自分の言いたいことを表現するということが戸惑いました。それまでは言葉で表現するだけでしたから。やること全てが新鮮なので、楽しくて楽しくて仕方がない。学問に対する垢がついてない分、すごく純粋に学ぶことができました。それから、とても大きな変化だったのが、建築にはリアリティがあるということです。文系だと、自分が属している組織が自分のアイデンティティになってしまうような一面があって、自分らしさを出しづらいついていました。建築の場合には、感性や理論などいろいろなものを、自分の工夫次第で、現実

に形として表現できる。その一連のプロセスが明確にたどれるというのは、重要なことだと思います。そこで自分が生きていると実感できることが、建築に転向して良かったなと思う一番大きなところなんです。今でもそういう部分に関しては新鮮さを感じますね。

ハミルトン 卒業してすぐに、イタリアの事務所に行かれたんですね。

柏木 そうです、不思議ですよ。きっかけは、ギャラリー間^{註1}のレンゾ・ピアノ (Renzo Piano) の展覧会で、ニューカレドニアのティバウ文化センター (Tjibaou Cultural Center) を見てすごく衝撃を受けたことです。今まで、土着の文化とうまく絡まった現代の建築は、あまり無かったのではないかなと思うんですね。その中で、それらを美しい形で融合させられる建築家がいることに感動しました。同じ時間を使って働くなら、やはり魅力を感じる建築家のところで働きたいですね。もうこの人のところでしか働きたくないと思って、手紙を何枚も送って、フランス語を勉強して、実際に会うために片道切符でパリに行きました。ここで働けるまで絶対に帰らないと心に決めて。結局、パリ事務所では駄目でしたがイタリアなら、ということで、レンゾ・ピアノのジェノバ事務所でも働くことができました。幸い、フランス語とイタリア語は似ているんですよ。フランス語の勉強をしたことが役立って、なんとかイタリア語でも議論できるようになってからは楽しく働けるようになりました。

やはり、自分がしたいこと、自分が作りたい建築というものを、素直に見つけることが大事だと思います。本で見ている世界が生で見られる、その環境に身を置けるということはやはり大きくて。どんな建築家のもとで働くかというのは、その後の自分の作品にもすごく影響が出ますし、最初にどういうスタートを切れるのかということは大事なことです。

ハミルトン シドニーに移られた経緯を教えてください。

柏木 僕がイタリアにいたときに、事務所の中でシドニーのプロジェクトが動いていました。それで、シドニーの建築家が毎月来ていて、仲良くなったんですね。その方から、オーストラリアではオリンピックの開催が決まり、これから景気が活気付くであろう中で、人手が足りていないからシドニーに来ないかと誘われました。オーストラリアで建築をするという発想自体がそもそも無かったのですが、熱心に声をかけてもらったので、じゃあ行ってみようかな、と。当時はオーストラリアの建築家を全く知らなかったの、一番将来性のある建築家は誰かと尋ねたときに挙げられたのが、エンゲレン・ムーア（Tina Engelen & Ian Moore）だったんですよ。だから、レンゾ・ピアノの事務所のときの熱量とは正反対で、運命のいたずらみたいなもので。それでエンゲレン・ムーアの事務所で働くことになったのですが、実はその建築家は僕が学生の時に雑誌で見かけた、すごく懂っていた建築の設計者だとあとあと分かったんです。これも何かの縁なのかな。

ハミルトン 二つの事務所から、何を学ばれましたか。

柏木 レンゾ・ピアノの事務所で学んだことは、自分が考えたことがそのまま現実に建ち上がるわけではないということですね。すごく良いアイデアがあっても、現地にその施工技術を持つ人がいなければ、それは机上の空論になってしまう。あのティバウ文化センターも、現地の施工者では到底できるレベルではないんです。その状況でうまくシステムやディテールを考えて、自分たちが提案した内容に対して責任を持って完成までのストーリーをデザインするという姿勢は、僕はすごく大事なことだと思いますね。シドニーでもいろいろなレベルの施工者がいて、それにどう対応するかで、作れるものが変わってきます。日本だと施工者が優秀なので、人任せにしてしまうことが多いですが、僕は建築家としてそれはしたくない。誰でも作れる簡単なものまで落とし込むことで、いろいろなものを国や文化を越えて作ることができる。そういうノウハウを学びました。

もう一つは、いろいろな国の人たちとのコミュニケーション方法です。事務所内で良い人間関係を築けないと、自分の居場所が見つけられないですし、建築を学ぶ以前にそこで生きること自体が難しくなる可能性があります。そこでの生活を楽しめる土台があってこそ、建築に専念できると思うんです。そのようなわけで、どうすればさまざまな文化の人と仲良くなれるかということ学びました。大切なのは、どうやって自分という人間に興味を持ってもらうかだと思います。出身大学とか、日本では自分のアイデンティティだったものが、海外へ行くと通じないんです。今までの自分が身に着けていた鎧が通用しなくなって素っ裸になったとき、相手の興味を引くものを自分の中に経験として持っていなければいけない。だから、学生時代にいろいろな経験をすることは大切だと思います。

——『同志社京田辺会堂』について

加藤 同志社京田辺会堂について伺いたいと思います。多数の応募者の中で、一等に選ばれるために力を入れた部分を教えていただけますか。

柏木 このコンペは参加条件が低かったの、最初からたくさんの方が応募することは想定していました。だから、周りとの違いを押し出して、評価の対象に挙がるのが大事だと考えました。最初に他の応募者が考えそうなパターンをある程度想定して、自分は同じ方向には行かないということは考えましたね。与えられた条件下で一番難しかったのは、二つの敷地に一つの建物を作るということです。それをどのように解釈するのが鍵になるだろうと思いました。それから、この建築には100年、200年後の姿も求められています。ならば100年、200年後もこの大学で価値として認められるものとは何かを考えました。この二つが建築の表現として評価軸になるところだと思って、重点的に掘り下げて検討しました。



同志社京田辺会堂内観

僕がこのコンペを通して考えさせられたことは、“価値”についてなんです。利用者にとって建築はどのような価値を持つのかということを真剣に問い詰めていけば、その建築の役割が見えてくると考えたんですね。今回のコンペではそれは何だったのか。僕は、新島襄^{註2}がこの大学を創るときに込めた教育理念だと思ったんです。それを建築としてどう表現するかということがすごく難しかったです。

それに加えて、この敷地に一体的な建築を作るにはどうすればいいのか。二つの敷地に一つずつの建築を建てると、二つの建築という枠組みは超えないわけですよね。そこで僕たちが考えたのは、この間の通路が建築の要素に見えるくらいに建築を分解していけば、一体的な形に見えるんじゃないかということです。そして、その外部通路にも建築内部の動線の機能を与えると、外にあるけれど建物の内部の機能を持つことになり、全体が一つの建築として成立すると考えました。もし、これをただの通路と思い込んでしまったら、そこで発想としては終わってしまう。同じ情報を見てそのままに受け取ると、皆と同じ答えになってしまうんですね。そうではなくて、まずは柔軟に情報の整理をしてあげないといけない。それを自分の創意工夫で面白いテーマに意識すること、そこから設計は始まっているのだと思います。その人にしかできない逸脱の仕方が個性になるわけですね。そこに集中すれば、面白いものを作る方法を自分なりに見つけられると思うんです。そういう意味

では、このコンペは自分としては面白かったですね。

他の応募者は勾配屋根だとかレンガ色の外壁だとか、条件に書かれていることを大事にしているようでした。でも、僕からするとそれがなぜ重要なかわからなかったし、その疑問を曖昧にはいけないだろうと思っていました。礼拝堂というと、同志社大学の中でも重要な場所ですよ。そこでそのような意味の無いものを踏襲する姿勢に、僕は疑問を感じたわけです。そういったことに着目した設計なので、この建築は同志社大学の学生にいろいろなことを考えるきっかけを与えていると思っています。なぜこの建築はこの設計なのかとか、そもそもなぜ礼拝堂は必要なのかとかね。新島襄は、この大学はキリスト教の伝道を主としていないと言ってるんですよ。だから、僕はこのようなニュートラルな礼拝堂を設計したんです。建築って、良くも悪くもすごく人に影響を与えるものだから、間違った導き方をしてはいけない。建築家は、その責任をきちんと果たさなければいけないと思うんですよ。

川本 礼拝堂の『言館』^{ことばかん}に対して、ラウンジの『光館』^{ひかりかん}がありますよね。厳かなイメージのある礼拝堂と同じ形式の空間をラウンジでも体験できることや、それによって気軽に礼拝堂に入れるようになることが強みだと思います。

柏木 まさにそれが僕たちの狙いです。礼拝堂に興味の無

い人にどうやってそれを身近に感じさせられるか、知らないうちに体験しているかということを考えました。学生のほとんどはキリスト教徒ではないから、何の脈絡もなく、宗教施設を彼らのコンテキストに押し付けると、この建築に価値を感じないかもしれない。そのような場所だけど、屋外通路から体験できたり、ラウンジでくつろいだりすることで、礼拝堂に行ったような気分になる。礼拝堂というものを自然にキャンパスライフの一部にすること、非日常にしないことが僕たちの大きなテーマだったんです。

もう一つ工夫したのが、両側の長手方向には一切開口部を設けていないということです。つまり、内部から見える方向を強制するということですね。ただ、そちらには広場があるのだから、長手方向に開口を設けて礼拝堂の存在をアピールするべきだと指摘されることもありました。確かに普通はそう思うし、一つの敷地だったら僕もそうしていたと思います。でもそれでは、二つで一つの建築であるという構成が薄れてしまう。もちろんアピールすることは大事だけど、デザインが理念を死守すべきだ、と考えてあの設計を貫きました。いろいろな価値がある中で、一番大事なものを見極めることが必要だと思いますね。

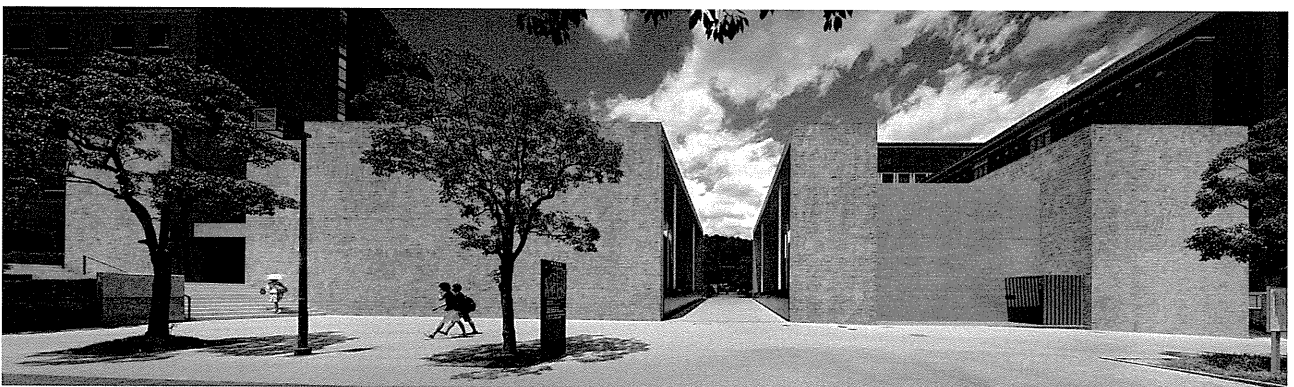
川本 海外での経験がその設計に影響を与えましたか。

柏木 具体的に言うと、例えば水辺空間がありますよね。

これはコンペでは求められていないもので、僕たちが独自に提案した内容です。僕は勝手に新島襄がお施主さんだと思っているので、鎖国状態の中、決死の覚悟でアメリカに行ってまで大学を創りたいという、彼の強い思いの原動力を象徴するものにしたいと考えました。そのときに自分が海外へ渡ったことを振り返ると、島国を出る不安と期待に溢れる気持ちの象徴は、海を渡ることではないかと思ったんです。それで、水盤の間を通り抜けていく空間を提案しました。新島襄の当時の思いを建築として表現するために、どういう方法があるのかということと考えられたのは、海外へ渡った経験が大きかったのかもしれない。

田中 水盤の配置にはどのような意図がありますか。

柏木 まず、連続性を意識しています。外から見たときだけでなく、室内に入ったときにも一つの建物であることを感じなければいけません。だから、構成としては全てが連続しているんですね。壁には空洞のブロックが、天井にはルーバーが、床にはフローリングがずっと繋がっている。こちらに水盤があれば、向こう側にも水盤がある。こうして視覚的にも繋がっているように強調しています。また、モーゼの十戒のような物語もイメージしています。宗教性を排除している建築なので、そういうストーリー性を自然にデザインに組み込んでいくことが重要でした。あとは、スロープになっているので、歩くと徐々に水面が見えてく

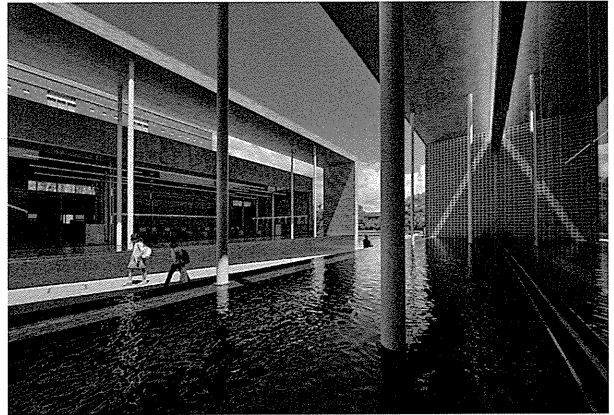


広場から観る

るんですよ。そうすると、水との出会いにもっと印象を植え付けることができる。いつかその印象がぱっとデジャブのように蘇り、呼び起こされる感動があるのではないかと、そのようなことを狙っています。

川本 一貫した設計姿勢として挙げられている、反復性について伺えますか。

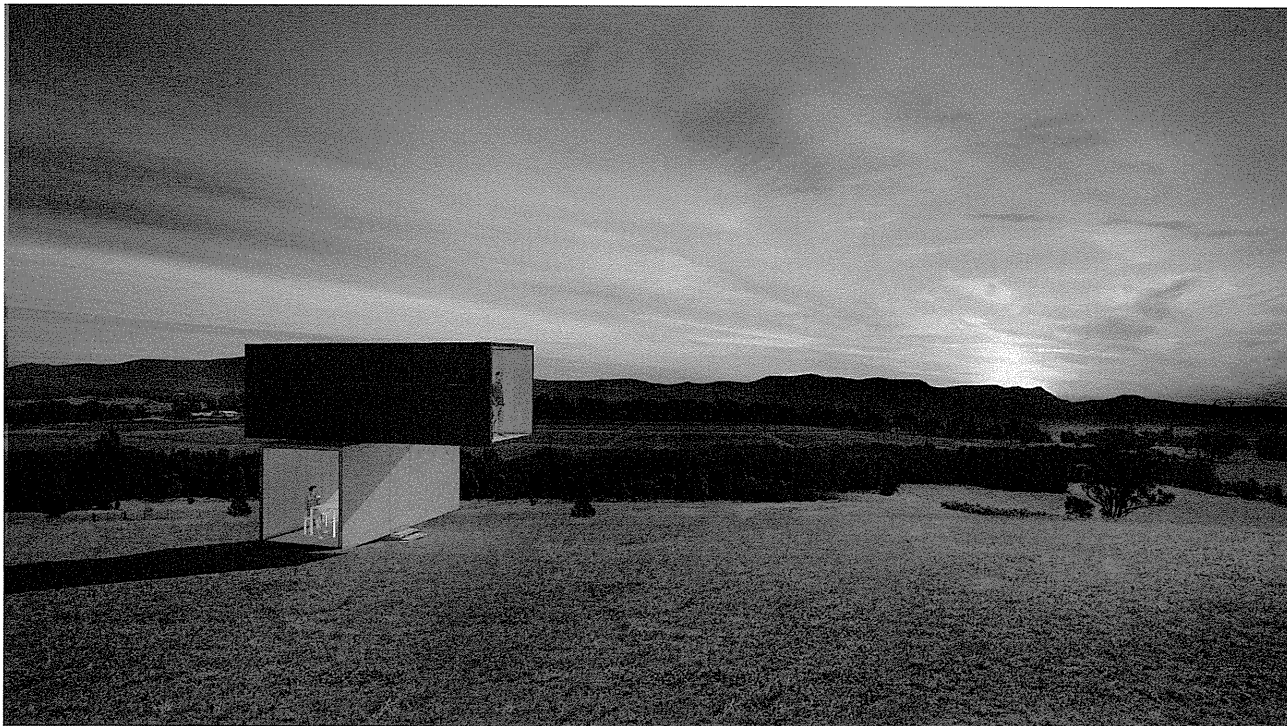
柏木 反復という手法には、建築に対する感性を高める効果があると思っています。僕は、やっぱり建築を通して感動を伝えたい。そのためには、感動を喚起しやすい状態を作ることも重要だと考えています。まず、反復させるということには、人間の心の底にある感性を興奮させる力強さがあるのではないかと考えています。もともと1個だったものが、100個、1000個と連なると、存在感や迫力が全く違いますよね。もう一つは、空間の認識に深みを与えるということです。この先に何かが見える、また何かが見える、さらに何かが見えるという、いわゆるレイヤーですね。こうして視線の距離を調整して空間認識を揺さぶるということも、人が感動しやすい状態をつくる上では有効だと考えています。同志社京田辺会堂でも、その効果を狙っているんですよ。というのも、これほど情報過多な世の中では、たくさんの人の感性にブレーキが働いている状態だと思うんです。だから、なかなか感動をつくれな。そのような現代人を、もう一度動物的な感受性の高い状態に導くこと、それが一つの重要なテーマではないかと考えています。



水盤と連続性



『SNEAKEROLGY』



近作『HunterValley House』
ワインの産地ハンター・バレーにある貸し別荘

—— 海外で建築を設計すること

加藤 最近のお仕事について教えてください。

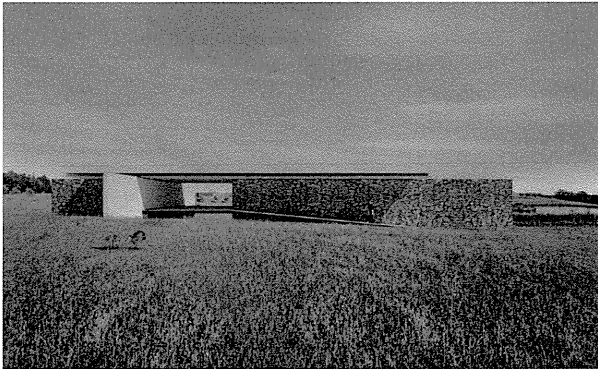
柏木 オーストラリアでは、住宅と店舗の設計が多いです。なるべくオーストラリアでしかできないような設計をしたいと思っています。というのは、気候が良いんですよ。雨が多いとか空気が乾燥してるとか、気候は建築の形態を決めてしまう要因だと思うんです。日本だと、高温多湿で雨も多いですし、乗り越えなければいけない与条件は多いでしょう。でも、オーストラリアではそれがあまりシビアではないので、いろいろなチャレンジができます。せっかくそのような環境にいるので、内部空間と外部空間が一体になったような建築を模索している最中です。

ある住宅では、建築とランドスケープの関係について考えています。普通、そこには明確な境界がありますよね。建築があれば、その余りがランドスケープになる、というような。そうではなくて、建築とランドスケープの境界がはっきりとわからない、自然と一体になった住宅が都会でできないか、というプロジェクトを進めています。もう一つは、室内にいたときに、外部との境界の先にも内部空間が続いているんじゃないかという錯覚を覚えるような住宅。都会の限られた土地の中で、境界が制約条件にならずに、逆に広がっていくようなイメージです。町家の坪庭の

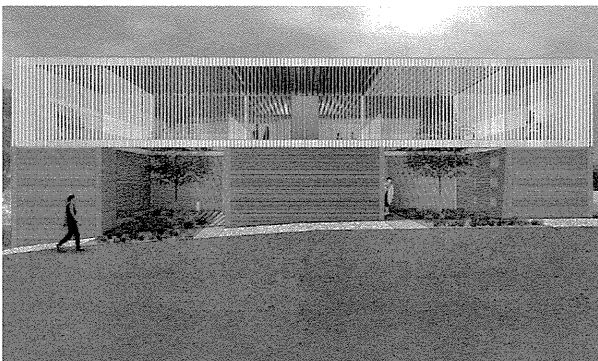
ように、外部のちょっとした物を取り入れることで空間の認識を変えていくということを考えています。

加藤 オーストラリアの特殊性や日本との違いはどのようなところにあるのでしょうか。

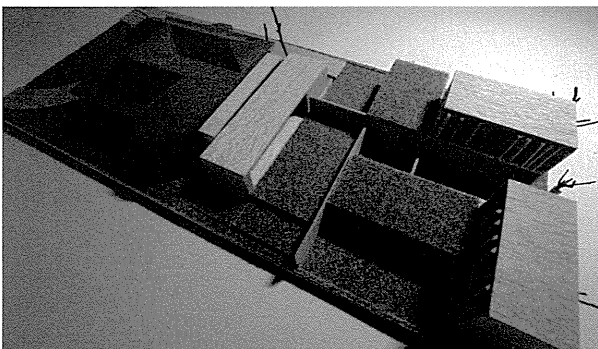
柏木 日本だと、施工者のほとんどは日本人ですよ。だから、言葉の面で困ることはないじゃないですか。オーストラリアは多民族国家なので、例えば施工者が皆違う国から来ていたりするんですよ。大工さんは中国人で、左官屋さんはまた違う国の人で、というように。それぞれが、その国特有の作り方というものを持っているんです。だから、これは普通こうやって作るんじゃないの、というように、日本の感覚でやっていると合わないということがあります。やっぱりその人たちの作り方がある程度尊重するような納まりにしないと、なかなか良い仕事をしてもらえなかったりしますね。そういうときはより作りやすいデザインに変えなければいけないのですが、できるだけ僕らはそういうことをしないで済む工夫をしています。例えば一部を工場で作って、現場で作るものを減らすとかね。そのようにすることで、施工者の技術や言葉、コミュニケーションの問題というのは、ある程度乗り越えていけます。だから、どうしてもこれは現場でやらなきゃいけないことなのか、違うところで作って現場に持っていける内容なのか。同じゴールに対しても違うやり方で考えられないかということを、常に模索していますね。



近作『Pokolbin House』
33,000坪の敷地に建つ住宅



近作『Cammeray House』
シドニーにある2世帯住宅



近作『Seatondale House』
シドニーにある3つの住宅がランドスケープと一体となった3世帯住宅

ハミルトン シドニーで仕事をする難しさについてお聞きしたいと思います。

柏木 外国で仕事をするものの一番の難しいところは、違う価値観のなかに自分が生きているということだと思っています。今まで知らず知らずのうちに染み付いてきた日本人としての考え方は、ずっと海外にいてもやはり抜けません。でもこの考え方を、本当の意味で共感できる人は世界に1億人くらいしかいないわけですよね。そこを気づかせてくれるような、問いかけをしてくれるような人がいたら良いな、ということで、事務所にも異なるバックグラウンドを持つ人に働いてもらうようにしています。オーストラリア、中国、インドネシアなど、全員出身が違いますね。自分の環境に、あえて相反するものや異質なものを作ること、違うものが生まれる可能性があると思っています。

いろいろな設計をしていると、どうしても迷いが生じて考えがぶれてしまうときがあります。自分たちのテーマがよくわからなくなってきたり、とかね。そういうときに一人だと、どうしても思考が凝り固まってしまう。そこで、もう少し客観的に見て、ぶれを指摘してくれる人がいることはすごく大事だと思っています。軌道修正し合える関係を事務所内にもつことで、作品に一貫性を持たせて作っていけると考えています。

作品ごとの状況に応じて作風が変わる建築家もいますが、あれは相当器用じゃないと、自己分裂を起こしてしまうと思うんです。冷静に乗り越えられる人はそれで構わないのですが。僕は自分のスタイルがぶれないようにすることに集中したほうが、少ないエネルギーで済むような気がしています。自分の立ち位置がはっきりするんです。これは結構重要なことだと思います。

加藤 現在、日本にも事務所を構えていらっしゃいますが、今後の活動拠点についてどのように考えていますか。

柏木 どちらも並行していきたいと思っています。異なる

状況を自分の中に作ることで、そのバランス感覚を保つシステムを持っておきたいんです。どちらかにシフトすると、知らず知らずに偏って、本来の自分の信念と違う方向に行ってしまう可能性があるのではないかと思います。今、国際化がどんどん進んでいて、日本人としての立ち位置しか分からないのでは世界では全くやっていけない、そういう時代になってきていると感じています。もし世界の50億人の感覚を自分のものにできればチャンスはいっぱい転がっているのに、日本人の感覚だけで世界と関わってはできることがすごく限られてくる、そう思いませんか。建築家としての僕の信念は、自分の扱ってるテーマがどれだけ人間にとって必然的なものなのか、どれだけ多くの人々が共有できるかどうか、ということなんですね。ただ、日本の建築が現在取り組んでいるテーマを全人類が理解できるかという、そうでもないわけです。だから、それを信念として貫くには、やっぱり日本だけでは難しいのかなど。そういう意味で、海外に身を置いて50億人と繋がる感覚を日々感じながらリアルに生きていくというのは、大事なことだと思っています。オーストラリアで毎日違う国の人たちと関わっていると、常に感覚を揺さぶられるようで、自然と50億人の単位というものを体感できる気がしていますね。

—— 日本人の建築家として

ハミルトン 日本人の建築家として海外で活動する際に、日本らしさを求められることはありますか。

柏木 それは意外とないですね。逆にそういう部分を求められても、僕自身が“こてこての和”というものはつくりたくない。ぱっと見で日本らしく感じられるものは、外国ではウケが良いのかもしれない。でも僕は、そこにある精神や、そのデザインの裏にある日本人の感覚と一体になってこそ、日本のデザインだと思うんですね。見た目の和ではなくて、精神としての和というものをいかに正しく

外国に伝えるかというのが、今後、日本の建築家には重要になっていくだろうと思っています。

最近の日本のテレビ番組を観ていると、外国人から見た日本のイメージがしばしば取り上げられていて、外国人が日本人のアイデンティティを理解するうえで重要な存在になってきていると思います。でも、外国人に日本のことを正しく伝えられているかという、そこには乖離がありますよね。日本と言えば京都の神社仏閣だというようなイメージがどうしてもあるので、それを乗り越えていかないと、世界の中での存在感が弱くなっていく気がします。

テーマパーク的に、見てくれだけ日本らしいものが世界に溢れていくようなことに、一人の建築家として協力したくないですね。日本の精神性を、日本人が新しい感覚で表現することが今の日本のデザインなんだということをできるだけ世界に伝えられるように、気づいてもらえるようにしています。先ほど言いました一軒の住宅なんかも、境界線を曖昧にして、広がりを感じさせたり、小さいものを小さいと捉えさせないで、それに無限の大きさを感じさせたりするような工夫は日本人の感性から生まれていると思うんです。そういうものがシドニーで価値あるものとして捉えてもらえるかどうかということも僕にとっては一つの挑戦です。

ハミルトン 国外の視点から見て、日本の建築の現状をどう思われますか。

柏木 今の日本の建築家が議論しているテーマの多くが、日本人以外には理解しづらくなってきている気がするんですよね。彼らが力を入れて考えていること、作っているものにどのような意味があるのか、僕自身同じ日本人でも理解しにくくなっています。違うことを考えなければいけない、新しいものを作らなければいけないということに比重が大きくなりすぎて、それ以外のものが疎かになってきているというか。自分は外部の日本人として、そういうところは修正していきたいと思っています。もっと素直に、

単純に表現していくべきだと思うし、きちんと押さえるべきものは押さえないといけないと思います。

例えば住宅だと、手摺りが無いほうが良い、というような設計がたくさん見られます。写真を撮影して、後から手摺りを付けたりとかね。そういうところに作品の比重を置くというのは建築としてすごく弱いと思います。こういうものは無いほうが良いと言って、できるだけピュアな状態で設計すれば、もちろん建築としてはシンプルに力強くなるとは思いますが、現実にはきちんと向き合わないといけないと思うんです。当たり前のことを当たり前のこととして考え、その上に建築家として何を足せるのかというところで、皆が勝負していかないと。僕はよそ者として、そのような設計をしていきたいと思っています。

—— 学生へのメッセージ

加藤 最後に、学生にメッセージをお願いします。

柏木 先ほどの話と繋がっているんですが、建築はすごくリアルなものだということをきちんと理解してほしいです。建築の寿命は50年、長いものだと100年単位ですよ。その時間の流れに耐えられるものを作る、という使命を我々は与えられているわけです。建築家はある種の特権階級で、地球に傷を付けて良いわけですよ。だから、現実から目を背けた、一過性で終わってしまうようなものを作ってはいけません。現実の環境と真面目に向き合うこと、その上で面白い価値を生み出していくこと、この二つの視点をどうか忘れないでください。それから、人生を賭ける建築設計のテーマにふさわしいものを見つけたいと思います。異なる価値観に触れることで見つかるものがたくさんあるので、その揺さぶりを自分にかけて続けて、自分なりのテーマを発見してください。

僕は、これだっていうものには全力投球で生きてきました。やるだけのことをやったら、あとはもう運命ですよ。そして、その運命は、熱量と比例しているような感覚があります。皆さんもいずれ個人の事務所を立ち上げれば、自分の力でこじ開けないといけない扉がたくさんあるでしょう。その扉を一生懸命探して、見つかったら何とでも開けようと、一生懸命努力する。それだけで何とかなるような気がするんです。僕の設計事務所も今で8年目ですが、不思議とやっていけています。だから、皆さんも挑戦すれば良いと思うんです。海外に出て、いろいろな経験をして、自分の血となり肉となるように蓄積させていく。今、世界での日本人の存在感は薄くなってきています。グローバルなコンテキストに身を置かないと世界の動きからは取り残されます。でも、そんな人間なら世界の中でも闘っていかれると思うんですよ。だから、皆さん頑張って、是非世界に飛び出してください。

1) 東京都港区にある、TOTO 株式会社が運営する建築とデザイン専門のギャラリー。定期的に建築家の個展が開催されている。

2) 同志社大学の前身となる同志社英学校を1875年に創設。幕末に国禁を犯してアメリカに渡り、約10年間アメリカやヨーロッパで学んだのちキリスト教の洗礼を受けて帰国した。国際感覚豊かな人材を育成することを教育の理念とした。